

平成23年度「海と船の博物館ネットワーク活動」事業完了報告

事業内容

全国24か所の博物館、資料館等が開催する海、船、川、湖沼に係る24の企画展を支援し、各地の文化財・調査研究資料等の展示を通して海洋及び海事知識の普及啓発を図った。また、海と船の巡回展展示アイテム3セットを全国7か所の博物館、水族館等に貸し出し、海と船の巡回展を開催し、海と船の博物館ネットワークホームページにて、海と船の企画展情報及び海と船の巡回展情報を告知し、ホームページの保守・運営を行った。

1. 「海と船の企画展」への支援（申請25館、支援実施：24館24企画展）

※福島県立美術館においては、東日本大震災の影響により企画展の開催を中止したため支援を辞退した。

- ①名 称：エビとカニのふしぎ 杉浦千里博物画の世界
主 催 者：北九州市立自然史・歴史博物館
開催時期：平成23年4月23日（土）～平成23年5月31日（火）
場 所：北九州市立自然史・歴史博物館
内 容：動物の博物画家である神奈川県出身の杉浦千里氏の描いた甲殻類（エビ・カニ類）を中心に博物画約100点とエビ・カニの生体および実物標本の展示により、行動・生態・形態を解説し、甲殻類の多様性を紹介。博物画に描かれているエビ・カニの剥製や生きたヤシガニ・ロブスター、北九州の生きたエビ・カニ類も合わせて展示した。エビとカニは一般の方々に身近な存在であるが、多くの場合、食品として認識されているだけで、実はよく知られていない世界の巨大なエビとカニ、変な形のカニ、毒ガニ、誰も知らない面白い生態などを解説してエビとカニをもっとよく知っていただくことができた。
- ②名 称：海流に魅せられた島 天草一祈りの原点とキリシタン文化—
主 催 者：西南学院大学博物館
開催時期：平成23年6月6日（月）～平成23年7月13日（水）
場 所：西南学院大学博物館
内 容：海で囲まれた天草島においてどのような文化が形成されたのか、ここで生活が営まれていたのか。さらに島国ゆえにどのような信仰がおこなわれていたのか、歴史的背景をもとに当時の天草島の文化受容の一側面を紹介した。天草島は海外との交易の窓口を担うなかで、島国特有の文化を形成し、さらにキリスト教文化も取り入れていた。天草の地にはコレジオが設けられ、キリスト教伝道のための書籍が刊行されている。「九州のキリスト教シリーズ」で取り上げた、島原、大分とは異なる様相を提示していた。
- ③名 称：チャールズ・ワグマン来日150周年記念
ワグマンが見た海—洋の東西を結んだ画家—
主 催 者：神奈川県立歴史博物館

開催時期：平成23年6月11日（土）～平成23年7月31日（日）

場 所：神奈川県立歴史博物館

内 容：1861年に来日した英国人画家チャールズ・ワーグマンの展覧会。
19世紀後半の西洋、アジアを描いた彼の作品の多くは、各地の港で集中的に制作されたものである。それらは当時の船旅、海兵の様子、日常利用された舟運の様子を今日に知らせる貴重な歴史資料でもある。詩情あふれる作品は美術的価値も高く、それを通じて海と船に生きた当時の人々の様子を紹介した。

④名 称：流氷からのおくりもの ～凍る海のふしぎとその役割～

主 催 者：北海道立オホーツク流氷科学センター

開催時期：平成23年7月30日（土）～平成24年2月29日（水）

場 所：北海道立オホーツク流氷科学センター

内 容：海に囲まれた日本の中で唯一冬に凍る海「オホーツク海」。一年のうち数ヶ月は雪と海氷と共に暮らす私たちにとって流氷を知ることが大事なことである。流氷が光を反射し海の温度の上昇を防いでいるなど、地球温暖化問題と流氷が大きく関係していることは、未だ極一部でしか知られていない。また、流氷はたくさんのプランクトンを生み豊かな生態系を築き上げている。今年はCOP10にて、生物多様性が議論されるが、この企画展ではより多くの方に凍る海と、この特殊な環境での生物多様性を理解してもらい私たちのすべきことを考えてもらった。

⑤名 称：伝説のクジラキングを追い！ーピノキオのクジラ探訪記ー

主 催 者：萩博物館

開催時期：平成23年7月2日（土）～平成23年9月4日（日）

場 所：萩博物館

内 容：クジラは子どもたちをはじめ誰もがよく知っている「海の王者」たる生物であるが、漠然としたイメージでしか捉えられておらず、生物としての真の姿や多様性が理解されているとはいいがたい。また、萩・北浦地域はかつて古式・近代捕鯨がさかんにおこなわれ、古来から多数のクジラが回遊してきた日本海有数の海域であるにもかかわらず、萩市民の間でのクジラに対する親近感や興味関心は必ずしも高いとは言えない。そこで、子どもたちがよく知っている童話「ピノキオ」の一部（ピノキオがゼペットじいさんを飲みこんだ巨大マッコウクジラを探しに出かける）の舞台に萩を取り入れてアレンジし、来場者が萩近海に過去から現在にかけて現れた20種類のクジラを探訪するという物語風の展示会を開催する。これを通じ、クジラそれぞれのバラエティ豊かな迫力や魅力を知ってもらおうと共に、萩がかくも多数のクジラたちが回遊する一大拠点であることを認識してもらい、萩の大自然への愛着と誇り、さらにはそれを愛し未来に引き継ごうという意思を醸成した。

⑥名 称：平成23年度企画展「海辺のすがた～江戸時代、讃岐の海岸風景～」

主 催 者：香川県立ミュージアム

開催時期：平成23年7月8日（金）～平成23年8月31日（水）

場 所：香川県立ミュージアム

内 容：瀬戸内海に面する讃岐国（現在の香川県）では、さまざまな海辺のすがたを目にすることができた。海辺には、美しいすがたを楽しむ場所としてむかしから愛された風景があり、人々がくらす場所があったのです。本展示では、江戸時代の海辺のすがたを、海辺をはなやかに演出した大名たちの船、江戸時代にはどのように海岸線をとらえていたのか、絵画や言葉に表された海辺のすがた、塩田開発に代表される人の手によって変えられていく海辺、の4つの視点から演出した。

⑦名 称：航海術と計器の発展—大航海時代から人工衛星まで
主 催 者：神戸大学大学院海事科学研究科海事博物館
開催時期：平成23年7月15日（金）～平成23年10月28日（金）
場 所：神戸大学大学院海事科学研究科海事博物館
内 容：人類が、どのようにして大海原を航海したのか歴史的に辿りながら、ロマンや苦勞を感じるとともに航海計器の発達、航海の安全にどのように関わってきたのか博物館所蔵の計器を展示して分かりやすく解説した。

⑧名 称：巡回企画展 おもれ— 山陰海岸ジオパーク
主 催 者：兵庫県立人と自然の博物館
開催時期：平成23年7月16日（土）～平成24年3月11日（日）
（兵庫県立人と自然の博物館：平成24年2月4日～3月11日）
場 所：巡回展示先：兵庫県、鳥取県、京都府下計7箇所
内 容：本企画展では、地域振興を担う人々、将来を担う子供たちに対して、地域資源を示し、活用する力を育むことを目的とする。同時に夏の海水浴客、冬のスキー客、カニツアー客など、多くの観光客にもみてもらうことで山陰海岸ジオパークの周知をはかった。

⑨名 称：特別展示「三葉虫とカブトガニの海」
主 催 者：笠岡市立カブトガニ博物館
開催時期：平成23年7月20日（水）～平成23年9月30日（金）
場 所：笠岡市立カブトガニ博物館
内 容：今回の特別展示では、世界最大の三葉虫や様々な三葉虫類、カブトガニ類、カブトガニと同じ祖先を持つウミサソリ類など古生代の海に大繁栄した貴重な化石を展示することにより、カブトガニとともに古代の海底を探検しているかのような空間を演出した。

⑩名 称：尚古集成館別館企画展「薩摩とイギリス —海が結んだ絆—」
主 催 者：尚古集成館
開催時期：平成23年7月23日（土）～平成23年10月13日（木）
場 所：尚古集成館
内 容：産業革命を成功させ日本近海へと進出してきたイギリス、その矢面に立たされた薩摩藩はイギリスを警戒し、工業化・近代化を推進しました。1863年両者は激突(薩英戦争)、その和平交渉でお互いが誤解していたことを知り、後に提携するようになった。この間の両国の関係を追った展示とした。

- ⑪名 称：鯨舟：形と意匠
主 催 者：太地町立くじらの博物館
開催時期：平成23年12月1日（木）～平成24年2月29日（水）
場 所：太地町立くじらの博物館
内 容：『南海得鯨図絵』（ニューベッドフォード捕鯨博物館所蔵）、『鯨舟絵巻』（太地町立くじらの博物館所蔵）などの絵画資料を参考にしながら複製画を制作し、さらにそのスキャンデータを使って展示パネルを製作し一堂に展示。鯨舟の形を考察するうえで重要な鯨舟模型や設計図を、鯨船の意匠を考察するうえで重要な熊野地方の宗教絵画なども参考資料としながら、太地鯨舟の形と意匠を解説した。
- ⑫名 称：南部藩の北上川舟運と黒沢尻河岸
主 催 者：北上市立博物館
開催時期：平成23年8月27日（土）～平成23年11月3日（木）
場 所：北上市立博物館
内 容：江戸時代、南部藩の廻米を100俵積の小繰船から350俵積のひらた船に積み替える中継港として栄えた「黒沢尻河岸」は、北上市の歴史的シンボルとして語り継がれている。本展は、北上川舟運の研究成果を、同港に焦点を絞り捉え直すことで、同港の実像をより鮮明化させるとともに、物流の要であった舟運について、深く理解する機会とした。また、本展の開催をきっかけとして、舟運に関する史跡めぐり、講演会、ワークショップ等の事業展開をめざし、舟運の町・北上であることの機運をさらに高めた。
- ⑬名 称：福岡市博物館特別企画展「日本とクジラ展」
主 催 者：福岡市博物館
開催時期：平成23年9月17日（土）～平成23年11月6日（日）
場 所：福岡市博物館
内 容：日本の捕鯨は、江戸時代に一大産業として発展したが、やがて欧米列強の日本近海での乱獲によって、日本の沿岸捕鯨は衰退を余儀なくされた。しかし明治以降、欧米の捕鯨法を導入し、やがて近海から南氷洋に進出し、再び活況を呈したものの、1987年から国際捕鯨委員会の商業捕鯨全面モラトリアムを受け入れた。この展覧会では、捕鯨の歴史と文化に焦点をあて、クジラと日本との関わりについて考えた。
- ⑭名 称：～海賊が見つけた～水族館のお宝大公開
主 催 者：(株) 海の中道海洋生態科学館（マリンワールド海の中道）
開催時期：平成23年9月16日（金）～平成23年11月27日（日）
場 所：マリンワールド海の中道
内 容：当館は主に生体を展示しており、標本類はほとんど展示されていない。専用の収蔵庫はないが、オープン後22年の間に収集した様々な貴重な資料がバックヤードなどで数多く保管されている。今回の展示では「生物の魅力や不思議の再発見」を主眼に置き、できるだけ実物に触れるようにすることで、本物の大きさ・重さ・触感などを感じていただくと同時に、体の中の仕組みや調査・研究のため、体内から取り出したものなどやや気持ちの悪い物も含め展示した。

- ⑮名 称：第7回特別展
黒船がつれてきた漂流者-大黒屋光太夫からジョセフ彦まで-
主 催 者：鈴鹿市大黒屋光太夫記念館
開催時期：平成23年9月23日（木）～平成23年11月13日（日）
場 所：鈴鹿市大黒屋光太夫記念館
内 容：日本に開国を促した“ペリー来航”については、一般によく知られている歴史的事象であるが、その船に漂流者が乗っていた事はあまり知られていない。また、ペリーより60年以上前に、最初に日本に開国を迫って来航したロシアのラクスマン来航については、その事件自体あまり一般的ではなく、大黒屋光太夫の送還を名目としての来航であったことは地元でもあまり知られていない。黒船来航の背景に漂流者の存在があったこと、異国との交通が極めて抑制されていた江戸時代において、難船により海を渡った者たちの異国での活躍があったことを紹介した。
- ⑯名 称：鯨によってもたらされた文化
主 催 者：五島観光歴史資料館
開催時期：平成23年11月12日（土）～平成24年1月31日（火）
場 所：五島観光歴史資料館
内 容：五島の歴史・文化は海によって生み出されたといえる。そのひとつに捕鯨があり、捕鯨の歴史をひも解き、又文化の流れを探った。
- ⑰名 称：企画展「猿島茶と水運－江戸後期から明治期を中心に－」
主 催 者：千葉県立関宿城博物館
開催時期：平成23年10月4日（火）～平成23年11月27日（日）
場 所：千葉県立関宿城博物館
内 容：江戸時代に関宿藩が領有していた猿島地方では、猿島茶が特産物として栽培され、関宿藩にとって大きな収入源となっていた。利根川東遷以降、河川流路が整備され水運が発達すると、猿島茶は利根川上流方面まで販路が拡大され、さらに品質を改良して江戸に供給され、幕末には海外に輸出されるようになった。このような猿島茶の広がりを水運との関わりから考察した。
- ⑱名 称：「鯨組主中尾家屋敷」公開記念企画展
海にいきる－江戸時代の唐津のくらしと玄界灘－
主 催 者：佐賀県立名護屋城博物館
開催時期：平成23年10月7日（金）～平成23年11月27日（日）
場 所：佐賀県立名護屋城博物館
内 容：豊かな玄界灘を擁する唐津の地が、いかに海と深い関わりをもち文化を形成してきたのか。ビジュアルで分かりやすい展示資料を中心とした本展覧会でその一端をひもとくことにより、海とともに培われた唐津の歴史・文化を多くの方々に再発見いただき、今後の関係文化遺産の活用も含めた地域活性化へとつなげた。なお、本展覧会は、江戸時代中期から明治初頭まで代々鯨組主として活躍した呼子中尾家の居宅（唐津市指定文化財）の整備公開記念展として開催した。

- ①⑨名 称：秋季企画展『江戸時代の兵庫津』
主 催 者：神戸市埋蔵文化財センター
開催時期：平成23年10月8日（土）～平成23年11月27日（日）
場 所：神戸市埋蔵文化財センター
内 容：神戸は奈良時代から現代まで続く港町として、著名である。平安時代末には平清盛によって港湾機能が整備されて、大きく発展を遂げ、また福原京に関係すると見られる祇園遺跡などもよく知られている。今回は発掘調査が近年大きく発展し、その成果の蓄積によって、様相が明らかとなりつつある中世末期から近世始めの兵庫津を採り上げる。東南アジアや中国、また日本各地で生産された陶磁器類や瓦、豊などを含む建築部材、五輪塔、石臼などの石造品、多数の銭貨、刀装具等の金属器や動物の骨及びその加工品など当時の生活を復元出来る資料には事欠かない。また当時の和船を復元した模型や、主として近畿地方の港湾都市遺跡から出土した遺物なども展示し、より具体的にこの時代を復元した。
- ②⑩名 称：豊穰の海—原耕と南薩摩の漁業史—
主 催 者：南さつま市坊津歴史資料センター輝津館
開催時期：平成23年10月8日（土）～平成24年1月16日（月）
場 所：南さつま市坊津歴史資料センター輝津館
内 容：黒潮が岸辺を洗う南薩摩では、古くから漁業が盛んに営まれてきた。当企画展では、豊かな海の恵みに育まれた南薩摩の漁業のあゆみについて展示・紹介する。また、カツオ遠洋漁業の父として知られ、南洋漁場の開拓中にインドネシアのアンボンで亡くなった原耕（南さつま市坊津町泊の出身）の足跡をたどり、原耕の残した業績について紹介した。
- ②⑪名 称：第19回企画展 近代技術国家をめざした明治の日本と呉
—明治の海軍と呉—
主 催 者：呉市海事歴史科学館
開催時期：平成23年10月15日（土）～平成24年1月16日（月）
場 所：呉市海事歴史科学館
内 容：日本の近代化とともに整備された海軍及び鎮守府等について、日清・日露戦争を経て呉鎮守府及び呉海軍工廠と呉のまちの変遷を現在見ることができる史跡等を踏まえて紹介した。また、地元のNPOと連携して明治期の史跡等を訪ねるまち歩きや写真の募集を実施し、展示に反映させ歴史家半藤一利氏の解説映像も併せて展示した。
- ②⑫名 称：指宿まるごと博物館Ⅲ 古代史海洋冒険談
主 催 者：指宿市考古博物館 時遊館 COCCO はしむれ
開催時期：平成23年12月23日（土）～平成24年3月25日（日）
※平成24年3月16日（金）～3月25日（日）は自主開催
場 所：指宿市考古博物館 時遊館 COCCO はしむれ
内 容：指宿市は、縄文時代より南島文化の窓口であった。本市に所在する縄文時代～古墳時代の各遺跡からは、南島との交流を物語る考古資料が数多く出土し、また、沖縄でも鹿児島県本土で発達した土器が

出土している。一方、古代以降中世にかけては、須恵器や貿易陶磁器など本州や大陸との交流を示唆する遺物も見られる。本企画展においては、海を渡ってきた様々な考古資料を取り上げ、古代交流史の一端を垣間見るとともに、貝塚、漁労具、製塩土器、船をかたどった祭祀遺物など海に関わる品々から当時の人々が生活の中でどのように海に関わっていたのかを紹介した。

- ⑳名 称：名前の秘密—海の生きもの編—
主 催 者：千葉県立中央博物館分館海の博物館
開催時期：平成24年2月18日（土）～平成24年5月6日（日）
※平成24年3月16日（金）～5月6日（日）は自主開催
場 所：千葉県立中央博物館分館海の博物館
内 容：身近だけれども知られていないことが多い、生きもの名前について解説した。海の生きものには、楽しい名前をもつものも多い。本企画展では、そうした生きものたちの名前を紹介しつつ、生物学的・文化的視点から生きもの名前について解説した。

- ㉑名 称：世界の運河・日本の運河
主 催 者：埼玉県立川の博物館
開催時期：平成24年3月10日（日）～平成24年5月6日（日）
※平成24年3月16日（金）～5月6日（日）は自主開催
場 所：埼玉県立川の博物館
内 容：陸路交通が未発達時代に交通・物資輸送手段として活用された運河の歴史は古い。荒川ゆかりのものには閘門式運河として明治期まで活躍していた見沼通船掘、荒川放水路の掘削を指揮した青山士がパナマ運河の建設従事がある。関東圏を筆頭に、日本と世界の運河に関わる技術・歴史・人の暮らしについて学ぶ機会とした。

【支援辞退】

- ㉒名 称：水辺の展覧会（仮称）
主 催 者：福島県立美術館
開催時期：平成23年9月17日（土）～平成23年11月13日（日）予定
場 所：福島県立美術館
※東日本大震災の影響により企画展の開催を中止したため支援を辞退

2. 巡回展の開催（7館）

日本全国の博物館や水族館等を対象に公募し、応募のあった7館に「海と船の巡回展」アイテムを貸し出し、展示を実施した。

また、経年劣化した巡回展アイテム1号機・2号機・3号機の定期メンテナンスのためオーバーホールを実施した。

- ①主 催 者：特定非営利活動法人あおもりみなとクラブ
青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸（1号機利用）
開催時期：平成23年4月25日（月）～平成23年6月26日（日）
場 所：青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸

- ②主 催 者：明石市立天文科学館（1号機利用）
開催時期：平成23年7月16日（土）～平成23年9月11日（日）
場 所：明石市立天文科学館
- ③主 催 者：青森県営浅虫水族館（1号機利用）
開催時期：平成23年10月1日（土）～平成23年11月6日（日）
場 所：青森県営浅虫水族館
- ④主 催 者：大阪市立海洋博物館なにわの海の時空館（1号機利用）
開催時期：平成23年12月13日（火）～平成24年1月29日（日）
場 所：大阪市立海洋博物館なにわの海の時空館
- ⑤主 催 者：熊本県富岡ビジターセンター（2号機利用）
開催時期：平成23年4月4日（月）～平成23年5月24日（火）
場 所：熊本県富岡ビジターセンター
- ⑥主 催 者：天草市立本渡歴史民俗資料館（2号機利用）
開催時期：平成23年7月17日（日）～平成23年8月28日（日）
場 所：天草市立本渡歴史民俗資料館
- ⑦主 催 者：大分市関崎海星館（3号機利用）
開催時期：平成23年4月16日（土）～平成23年5月30日（月）
場 所：大分市関崎海星館

3. 「海と船の博物館ネットワーク」WEBサイトの保守、運用
インターネットを活用し、「海と船の博物館ネットワーク」WEBサイト上に
て全国の海事関係博物館施設の情報を広く公開し、「海と船の企画展」情報及び
「海と船の巡回展」情報の公開を実施した。

4. 企画展支援館の研修会の開催（開催の中止）
過去、「海と船の企画展」支援や「海と船の巡回展」を開催した博物館等が参
加して、支援企画展の成功事例紹介、参加博物館同士の情報交換や相互連携を目
的とする「海と船の博物館ネットワーク研修会」は、船の科学館 本館展示の休
止に伴い、万全の体制での開催が困難あり、開催を中止した。

5. 事業検討会の開催（開催の中止）
船の科学館が本館展示を休止し、現状、将来計画を策定中にあつて、本ネット
ワーク事業の評価とともに将来的な目標を考える事業検討会の開催意義は薄いと
判断し、開催を中止した。

事業目標の達成状況

1. 「海と船の企画展」への支援

実施24企画展ごとに目標達成状況は異なるが、相対的に見て地域性を活かした企画展を通して、海洋及び海事知識の啓発を広く図ることができた。

「海と船の企画展」入場者数各館合計542,635人

①主催者：北九州市立自然史・歴史博物館

入場者数：47,128人（うち、エビとカニのふしぎ展19,294人）

成果：目標入場者数を超えることができた。博物画、パネル、標本、生体を展示し、エビとカニの形態、生態、行動などを解説することによって、甲殻類の多様な世界を知っていただく事ができ、当初の目標を達成できた。

②主催者：西南学院大学博物館

入場者数：2,635人

成果：本事業により、これまでシリーズ化してきた「九州のキリスト教」も、九州圏内で知られるようになってきたと実感している。資料の借用、展示依頼についても、各自治体、関係各位に好意的に対応してもらえるようになってきた。一昨年から毎年行なってきた継続事業が理解され、ひとえに、本学博物館を核とした海外交流史およびキリシタン教に関する文教施設のネットワークができつつあるように感じる。また、こども向けのワークショップを開催し、本学博物館利用者の新規開拓や対象の裾野を広げることができた。大学博物館という一般的に敷居の高い場所が、身近な存在となってきたことは、本事業のおおきな成果と考えている。なお、本事業の終了後にも関係自治体から資料調査のお願いや今後の調査研究の協力体制の確立など、先方からの打診があった。今後も、こうした良好な関係をもった自治体を増やしていき、有意義なネットワーク構築を目指していきたいと考えている。

③主催者：神奈川県立歴史博物館

入場者数：32,091人

成果：助成をうけた特別展自体の入場者目標は13,000人であった。実際の入場者数は12,446人であり、95.7%の達成であった。この数字だけ見ると未達成ということになるが、当館の当該期間の入場者数実績からすれば、たいへん大きな成果をあげたことになる。さらに特別展の成果として、通常と異なるマスコミへ露出したことにより、初めて来館した方が多かったことが挙げられる。そして、当然のことながら、ワグマンという画家、その時代、海や船に対する関心が高められたことも成果として挙げられる。

④主催者：北海道立オホーツク流氷科学センター

入場者数：16,836人

成果：企画展全体では入場者数はマイナスになった。科学教室は予想以上の集客、おさかなロボットは予定どおりの集客となった。パネルなどの展示ではインフルエンザの流行、流氷シーズンの流氷状況が悪かったなどにより来館がすくなく上がったことが挙げられる。

⑤主催者：萩博物館

入場者数：40,730人

成果：萩博物館は総合博物館として平成16年度に開館し、18年度までは専ら年配層を対象に歴史・文化に関する特別展・企画展を開催してきた。しかし、19年度夏に初めて海をテーマとした親子連れ向けの自然科学系の企画展（「君と竜宮城へ～知らされる深海への旅～」：日本財団助成事業）を開催したところ、大盛況となり開館以来最多の来場者数を記録した（26,408人：平均455人／会期58日）。さらに、21年度特別展（「マンタの海流大冒険～まぼろしの海神王国をめざして」：日本財団助成事業、32,565人：平均552人／会期59日）、23年度特別展（「2010年UMAとの遭遇～知られざるミステリーアニマルの世界」：日本財団事業、67,769人：平均1,043人／会期65日）を開催したところ大盛況となった。これらの成功により市内外の人々の間で「夏休みは萩博物館へ！」という雰囲気定着してきたため、四度目の挑戦として「水」に関わる生物をテーマに開催したのが今回の特別展である。結果として、この展示は申請時の来場者数予想30,000人の136%にもなる40,730人（平均627人／会期65日）の入場があり、目標を十分に達成できた。来場者数は、当館が過去に開催した特別展・企画展において歴代第2位となった（1位は昨年度申請の「2010年UMAとの遭遇」展）。

⑥主催者：香川県立ミュージアム

入場者数：7,054人

成果：来場者数については、目標を達成できなかったものの、昨年度同時期を上回る来場者数を確保でき、一応の成功をみたと評価できるであろう。展示構成をする上で、常設展示の一部であることから、館蔵資料をメインとする内容であったが、海岸風景を展示資料からより具体的に把握してもらうために、助成をうけて、館外から資料を借用した。借用した、錦絵による丸亀港のすがた、県内最古の国絵図にみられる海岸線、県内でも認識の低い江戸時代の引田に展開した塩田の絵図は、今回の展示の中でも重要な意味をもつ資料として機能し、展示内容を広げる効果が高かった。

⑦主催者：神戸大学大学院海事科学研究科海事博物館

入場者数：974人

成果：来館者数は当初の計画を下回ることとなった。大学博物館ということで、身近に多くの来館期待者となる学生がいるにも関わらず来館してもらえないまでにならなかった。船舶の現在地をリアルタイムで表示する MaritimeTraffic.com の船舶マップ展示は、現代の船舶運航システム、最新の電子海図や AIS を使った航海術の紹介とともに海事愛好家方に興味を持って頂けたようである。また、現在は使われていないがモールス信号は、実物を使って音で確認できるという点からも小中高校生に関心を持ってもらえたようである。従来からのガラス越しの距離を置いた展示ではなく、色・模様・文字などが判別できるように展示できたことは、幅広い年齢層に分かりやすく、また、海図などを見直す機会が提供できたことは評価できる。

⑧主催者：兵庫県立人と自然の博物館（ほか7施設で巡回開催）

入場者数：71,055人

成果：地域振興を担う人々、将来を担う子どもたちに対して、地域資源を示し、活用する力を育むことを目的とした本事業では、巡回先の施設、関係する地元組織との協働関係が不可欠であった。関係グループと、展示内容の企画・準備・設営などを行ったことでノウハウ交換、情報交流を行うことができた。次年度以降は、当館がもつ地域連携グループ・地域研究員登録の制度活用、活動報告の場である「共生のひろば（於 ひとく）」参画などに連動するように交流を深めたい。また、発展的に但馬地域で「共生のひろば」的な交流の場もてた。巡回先も含む総入館者数は71,055人と好調であった。これは、神鍋高原、てんきてんき丹後といった道の駅に展示したことが大きい。多くの観光客の目に触れることになる意味で有効であった。また、道の駅は地元組織も深く関わっており、地域との関係を深めるためにも有効な場所といえる。次年度は県内のいくつかの道の駅にキャラバン事業を組む予定である。各巡回先では研究員2名を担当者としたが、事業規模を考えると地元の協力なしには実現できなかったといえ、前項でも示した関係グループとの協働は大きな要因であった。

⑨主催者：笠岡市立カブトガニ博物館

入場者数：16,769人

成果：今年度は、7月20日から9月30日までと、昨年度より1ヶ月間期間を延長してカブトガニ博物館ならではの特別展示「三葉虫とカブトガニの海」を開催し、期間中16,769人の来館者があった。7月20日から9月30日までの同一期間で比較いたしますと、平成22年度が17,065人であったのに対して、平成23年度は16,769人と前年度より296人の減少となり、わずかに目標を下回る結果となった。太古の時代からその姿をほぼ変えないまま現在に至っているカブトガニと、過去に大繁栄を遂げたものの絶滅してしまった三葉虫という、対照的な海の生物にスポットを当てた展示を行うことができ、カブトガニの貴重さや保護の大切さが学べる展示となり、カブトガニの保護啓発という独自の目標も概ね達成できたものと考えている。

⑩主催者：尚古集成館

入場者数：75,339人

成果：企画展開催時期には東日本大震災直後の自粛ブームが鎮まり、新幹線の開業効果が現れて入館者が増加した。新幹線ブームが入館者増の最大要因であることはいなめない。2012年が生麦事件、2013年が薩英戦争150年にあたる。このため教職員など学校関係者をはじめ、鹿児島日英協会・鹿児島日英協会などの関係者に展示図録を配布し続けてきた効果が現れはじめ、教育関係者の中に、海洋国家という視点の、尚古集成館の展示に興味を抱く方が増えてきている。こうした教職員が、生徒を引率して来館してくれたことも入館者増に繋がった。

⑪主 催 者：太地町立くじらの博物館

入場者数：15,107人

成 果：煌びやかに彩られていた太地鯨舟の姿は、絵画資料中に表現されてはいるものの、詳細な形、意匠、色などを表したものはほとんど存在しない。絵画資料を参考に、このたび改めて古の鯨舟の鮮やかな姿を描き、パネル化し、展示することで、太地鯨舟の装飾が独特なものであったということを効果的に見学者に対して伝えることができたものとする。鯨舟のかつての姿を絵画で表現したので、非日本語話者を含むあらゆる見学者に対して比較的理解しやすい展示になったのではないだろうか。昨年9月の台風12号による紀伊半島豪雨災害の影響で熊野地方を訪ねる観光客の数が大きく減少するなか、入場者数が昨年比約二割減に留まったのはむしろ幸いであったと言えるかもしれない。企画展としては終了したが、本企画展を開催することで獲得することができた太地鯨舟の情報は大変貴重であり、今後の展示に大いに活用することが期待できる。

⑫主 催 者：北上市立博物館

入場者数：5,437人

成 果：北上川舟運の学術的な研究成果と実物資料がもつ歴史的意味を融合させ、黒沢尻河岸及び北上川舟運が果たした役割について、わかりやすく紹介することができた。3.11の震災による影響で、入場者の大幅な落ち込みを懸念していたが、概ね前年並みの入場者を維持することができた。北上川流域の市町村を中心に本テーマに興味をもっている人が、期待以上に多く来館されたことが、その要因のひとつであったと自己分析している。アンケート結果（入場者5,437名のうち回答者111名）では「たいへん満足」「満足」が100名、「普通」が11名。「模型やイラストがあり、とても見やすい展示だった」「わかりやすくとても良い。一般の方々も興味を持てる展示だった」などの感想をいただいた。本テーマに興味をもつ人が期待以上に多く来館され、会期中に、その人たちの申し出により新たな資料を展示することもできた。

⑬主 催 者：福岡市博物館

入場者数：17,290人

成 果：入場者は見込みに達しなかったが、日本とクジラを紹介する決定版の展覧会として、また、日本とクジラとのかかわりを広く知っていただく展覧会として充実した内容で開催できた。普段の特別展の観覧者は大人が多くを占めるが、今回の展覧会は祖父と孫、親と子が多く第一目標は達成された。しかし、展示・催事は充実させることができたが、広報に力を割く余力が残っておらず、入場者数が伸び悩んだ。

⑭主 催 者：(株)海の中道海洋生態科学館（マリンワールド海の中道）

入場者数：121,748人

成 果：水族館においては、常設展示は基本的に生物であり、標本を展示することは稀である。今回の展示では、保管されていた水族館の「お

宝」である貴重な標本類を海賊と絡めて展示したが、従来と大きく変えたのは、その多くを「触れる」ことができることであった。入口で海賊衣装の職員が出迎えたり、海賊キャラによる展示物の紹介など工夫を凝らして実施したことで、来館者には概ね好評であった。

⑩主 催 者：鈴鹿市大黒屋光太夫記念館

入場者数：1, 313人

成 果：来館者数に関しては、1,300人の目標に対して1,313人の来場があり、数値上の目標を達成することができた。これは、平均33.6人/日の来場であり、通常平均約20人/日から比べると大きく来館者が増加したことにもなる。この要因は、「黒船」という一般の方々になじみの深い内容であったため、興味を引いたことが大きく影響したようである。マスコミ（特にテレビ）については、取材が例年より多くあり、NHKの東海地方のニュースで取り上げていただいたのをはじめ、複数のニュース番組で放送していただいた。そのため、三重県内だけでなく、岐阜県・愛知県などからの来館者も多くみられた。また、関東・関西地方からの来館者も例年と比較して増加した。これらは、支援を活用してポスター・チラシの枚数を増やすことができたため、より広い範囲に広報する事ができたことが大きな要因と思われる。地元のケーブルテレビでこの展示内容に沿った番組を作成していただき、展覧会終了後に三重県内で放送された。来館者以外にも展示の内容を知って頂く機会になったと思う。

⑪主 催 者：五島観光歴史資料館

入場者数：1, 606人

成 果：企画展期間中の目標入館者数2,500名に対して、入場者数は1,606名で、対目標入場者数割合は64.2%であった。これは、昨年度の企画展を入館料無料で行ったが、今回は有料（通常料金）で開催したことも影響したと思われる。しかしながら前年度同一期間の入場者数と比較すると、前年度970名に対して165.6%の増加となっている。特に1月は前年度に比べ倍以上の入館者数となっている。また入館者からの展示内容に関する感想やアンケートでの反応は概ね好評で、企画・展示の内容や方向性は一定の評価が出来るものになっており、常設展のみの場合に比べ企画展を行うことで集客効果を得られたことがわかる。

⑫主 催 者：千葉県立関宿城博物館

入場者数：26, 591人

成 果：開催期間の目標入館者数30,000人に対し、26,591人 88%達成した。また、さしま茶協会に協賛を依頼し、「猿島茶」のバナーの借用、歴史講座・「猿島茶の美味しい入れ方」への講師派遣、「猿島茶探訪」での茶農家、工場の訪問などに協力してもらい多くの成果を得たことにより、県をまたがった周辺地域との連携を深めた。

⑬主 催 者：佐賀県立名護屋城博物館

入場者数：13, 942人

成 果：船模型や漁業図・航路図など県内外からのビジュアルな一級資料の

展示紹介と、より充実した広報普及活動を行うことができた。江戸時代の唐津と海との深い関わりについて、漁業・海運という視座から多角的・立体的に検証・紹介しようという本企画展は、地元でも初めての試みであったが、その重要性について来場者の理解・関心を高めることができ、「海から見た歴史」をわかりやすく身近に感じていただくことができたと考える。また、企画展の出品資料や展示内容をまとめた図録等を作成できたことで、様々な学術情報を広く一般に提供し、企画展開催の意義をより深化させることができた。記念シンポジウムでは、「海」をキーワードとした様々な分野の研究者を集め、研究の最前線の情報を広く公開し、展覧会の内容理解の一助とすることができた。

①主 催 者：神戸市埋蔵文化財センター

入場者数：4, 571人

成 果：中世・近世の展示会は原始・古代の展示会に比較し、一般の見学者にはなじみが薄い。しかし今回は江戸時代の展示会としては、大幅に入館者を獲得することができたものと評価できる。先年度助成事業として行った「中世の港湾都市神戸」の入館者数が3,370人だったことを考えると、達成度は大きいものと考えられる。目標入場者数を達成できたのは、一般的になじみの薄い江戸時代の遺物を判りやすく説明できた結果と自己評価できる。展示期間中は随時見学者の説明に努めたのも、入館者獲得に大きく影響したものと考えられる。

②主 催 者：南さつま市坊津歴史資料センター輝津館

入場者数：3, 722人

成 果：当該企画展では、豊かな海の恵みに育まれた南薩摩の漁業のあゆみや、カツオ遠洋漁業の父として知られ、南洋漁場の開拓中にインドネシアのアンボンで亡くなった原耕（南さつま市坊津町泊の出身）の足跡をたどり、原耕の残した業績について、古写真や映像など関係諸資料等を展示し、広く一般市民に向け紹介を行いました。企画展図録については、昨年引き続き、入手の問い合わせなども多く好評でした。入場者数という点では、期間内入館者数が申請時目標入館者数に比し148.88%の目標達成率となり、当初の入館者数目標の約1.48倍に達しました。今回の企画展では、企画展の開催前に報道機関を対象とした企画展事前説明会（展示映像の試写会含む）を開催し、TV・新聞での報道がなされるなど、積極的に広報に取り組んだことや、企画展開催中にテーマ関連の講演会等を開催し、相乗効果があったことなどが目標達成に繋がったとみられます。

③主 催 者：呉市海事歴史科学館

入場者数：14, 218人

成 果：広島県内での広報を強化するも、東日本大震災の影響により総来館者数の減衰した。しかし、近隣からの来館者割合の増加した。これは3月中旬以降変わらない傾向である。また、歴史家 半藤一利氏への取材と映像展示のほか、NHK スペシャルドラマ「坂の上の雲」の放送、戸高館長によるトークイベント等は、マスコミ取材等にあ

る程度の効果が見られた。広島県及び近隣対策として地元の NPO くれシェンドと活動連携し、特に呉市民への広報は、ある程度の効果が見られた。

②主 催 者：指宿市考古博物館 時遊館 COCCO はしむれ

入場者数：2, 824人

成 果：入場者数に関しては、対目標入場者数割合が117.6%、対前年度同一期間入場者数割合が122.7%と、微増ではあるが目標を達成することができた。

市内外へのマスコミを通じた広報・情報発信等をさらに積極的に進める必要がある。

③主 催 者：千葉県立中央博物館分館海の博物館

入場者数：3, 475人

成 果：入場者のアンケート結果からは、ダイオウイカ、ダイオウグソクムシなどの大型の標本や、スベスベケブカガニ等のユニークな名前等の人気が高かった。地方名への関心も高く、概ね高い評価を受けているようである。また、この事業を横断幕やポスター・リーフレットで知ったという回答が多く、助成を受けての広報が効果的であったと考えられる。

④主 催 者：埼玉県立川の博物館

入場者数：180人

成 果：博物館全体の来館者が例年より少なめであるが、これは寒さが続く今年の気象条件によるところも大きいと考えている。問い合わせなどから、企画展に対する関心は高いと考えている。

【支援辞退】

⑤主 催 者：福島県立美術館

※東日本大震災の影響により企画展の開催を中止したため支援を辞退

2. 巡回展の開催

巡回展展示アイテムの3セット（1号機：10点、2号機：7点、3号機：6点）を、全国7か所の博物館、水族館等において開催し、子供たちを中心とした海洋及び海事知識の普及啓発を図ることができた。

「海と船の巡回展」入場者数各館合計97,729人

①主 催 者：特定非営利活動法人あおもりみなとクラブ

青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸（1号機利用）

入場者数：16, 555人

成 果：入館者等に対して、展示アイテムの内容を理解して頂くために、解説員（2人）を配置して対応した。また受付にて「海と船の巡回展」の開催について告知した結果、多くの方々に観て頂けた。展示アイテムをとおして子どもから大人まで海の生きものたちの生態・生活

を知って頂けた。

②主催者：明石市立天文科学館（1号機利用）

入場者数：31,772人

成果：「海のトリビアと海上保安庁の天文資料展」として開催。

講演会も開催

7月18日 星と海のトリビア講座①「星と航海」

帆船日本丸元船長 橋本進

7月24日 星と海のトリビア講座②「星を使った地図作り」

海上保安庁海洋情報部 仙石新

8月3日 星と海のトリビア講座③「船の技術～手旗とロープワーク教室」

船の科学館 梶谷東輝

③主催者：青森県営浅虫水族館（1号機利用）

入場者数：29,903人

成果：展示アイテムに自由に触れながら海の生き物について楽しく学び、理解を深めるための展示で、幅広い年齢の来館者が興味を示した。展示アイテムの中には、子供よりも大人が興味を示すモノもあった。

④主催者：大阪市立海洋博物館なにわの海の時空館（1号機利用）

入場者数：9,900人

成果：昨年よりも展示アイテム数を増やしての開催で、展示棟1階のスペースを広げて展示したところ、来館者により楽しんでいただけた。また会期中は、大阪市内の小学生を対象とした「海・船・港の絵画コンクール」、クリスマスイベント、正月イベントなども同時に開催することで、来館者の増員が図れた。

⑤主催者：熊本県富岡ビジターセンター（2号機利用）

入場者数：4,461人

成果：今回借用した巡回展アイテムと常設展示資料との相乗的活用が図られ展示場内のボリュームアップと当地の自然環境を多面的に紹介、解説することができた。展示アイテムを際立たせるために、配布資料の解説シートをA1サイズに拡大印刷して掲示し、利用者には適宜声を掛け、展示アイテムの実演とともに楽しみ方を紹介した。ま尚、会期中には講演を実施して、近隣の小中学校や保育園等の教育機関、地元住民、全国からの旅行者にご利用いただけた。これらの事業により、地元の教育機関に通う幼児から小・中学生に対しても身近な自然環境を守る重要性和海洋環境に支えられるわが国の経済活動を再認識していただくことができた。また、巡回展展示アイテムの設置に伴い、これまで固定されていた常設展示の配置に変化が加わり、新たな展示資料の配置を考える機会となったことも思わぬ成果であった。

⑥主催者：天草市立本渡歴史民俗資料館（2号機利用）

入場者数：1,443人

成果：期間中の来館者の内18%（269人）が子どもであった。そのため展

示アイテムが乱雑に扱われるケースもあり、対応に苦慮した。また、広報関連では市内の小学校をはじめとする教育機関や市民センターなどの公共施設にポスターを送付するとともに、報道各社にもアナウンスを実施した。結果、多数の取材を受けた。

⑦主 催 者：大分市関崎海星館（3号機利用）

入場者数：3, 695人

成 果：4月16日のリニューアルオープンに合わせて展示した。館内の常設展示資料の他に巡回展示コーナーを設け、2か月周期で巡回展示する計画のスタート展示とした。来館者は、常設展示を見るだけでは得られない感動や学びがあり、開催館としても前年に比べて来館者増となり、よい成果がえられた。

3. 博物館ネットワークの保守、運用

ネットワークホームページを活用し全国の海事関係博物館等の情報を公開・運用するとともに、海と船の企画展情報、海と船の巡回展情報、各館イベント開催情報等を広く一般に公開するとともに、ネットワーク成果物情報や研修会成果等を公開・整理し、博物館関係者向け情報の拡充を図った。

①アクセス者数：23, 495人

※集計期間：2011年4月1日～2012年7月31日

②アクセス者の平均閲覧ページ数：2.98ページ

4. 企画展支援館の研修会の開催（開催の中止）

過去、「海と船の企画展」支援や「海と船の巡回展」を開催した博物館等が参加して、支援企画展の成功事例紹介、参加博物館同士の情報交換や相互連携を目的とする「海と船の博物館ネットワーク研修会」は、船の科学館 本館展示の休止に伴い、万全の体制での開催が困難あり、開催を中止した。

5. 事業検討会の開催（開催の中止）

船の科学館が本館展示を休止し、現状、将来計画を策定中にあつて、本ネットワーク事業の評価とともに将来的な目標を考える事業検討会の開催意義は薄いと判断し、開催を中止した。

以上